

# 私的「渋沢栄一」論 「日本資本主義の父」としての生きざま

本誌主幹 大中吉一

共に日本の近代経済発展に尽力したとされる渋沢栄一と五代友厚は、同じ時代を生きながら、ライバルとして、そして盟友として、幕末から明治維新にかけて一挙に西洋化した日本の激動期に、その天性ともいえる才覚で、日本の東西においてそれぞれがその先見の明を発揮し、日本の近代化と発展に寄与した人物だと思えます。

## 財閥とは一線を画した 渋沢流の近代経済

まず、3回に渡って渋沢栄一の足跡を追い、さらに引き続き五代友厚像を詳らかにしながら、現在に至る日本の経済発展と民主主義の変遷を考えてみたいと思えます。

まず、渋沢栄一ですが、「近代日本経済の父」と呼ばれ、道徳と経済の合一（道徳経済合一説）を掲げ、日本初の銀行（第一国立銀行）設立で近代金融システムを確立、生涯にわたり産業教育・社会福祉の発展に貢献したことで広く知られています。

そうした足跡を残した渋沢翁ですが、生まれは江戸時代末期の1840年に埼玉原深谷市の農家でした。生地



渋沢栄一翁

は武蔵国榛沢郡血洗島村（現在の埼玉県深谷市血洗島）、渋沢翁本人も「恐ろしげなるこの村名」と語っている記録もある「血洗島」という地名は、赤城の山霊（ムカデ）が日光の山霊（大蛇）との戦いで腕に傷を負いそれを洗った」という説や、かつて戦場となつたこの地で腕を失つた兵士が片手を洗い、土地の人がその手を近くに葬つたなどと言つた伝説があるそうです。

また、アイヌ語で端を意味する「ケセン」気仙岸、末端、下の意）からの派生語で「ケセン」血洗」となったという説もあり、さらに「チアラジマ」度重なる利根川の氾濫のため地が荒れたと「や」地を洗うように流れた」と言う説もあるようです。

渋沢翁は幼少のころから従兄の尾高惇忠から『論語』を学び、漢学の手ほどきを受け、同時に家業である畑作や

養蚕、藍葉の買入、藍玉製造販売に励んだそうです。

そうした背景と幕末の「尊皇攘夷」思想に影響を受け、高崎城の乗っ取りや横浜焼き討ちを企てましたが、何かそれを中止して京都に旅に出ます。

そこで一橋慶喜に仕えることになりました。徳川幕府15代将軍となつた慶喜の家臣として慶喜の弟、徳川昭武に随行してパリの万国博覧会や欧州の実情を見る機会に恵まれたのは1867（慶応3）年、27歳のときでした。

1868（慶応4＝明治元）年に帰国すると時代は明治となり、徳川慶喜は駿河国駿府（静岡県静岡市）の宝台院で謹慎生活となっていました。渋沢翁は静岡で「商法会所」を設立し、その後明治政府に招かれ新しい国づくり

に深く関わるのは「存知の通りです。「商法会所」とは銀行と商社機能を兼ね備えた株式会社のような組織で、明治新政府から許可された石高拝借金を元手として、藩士や商人から資金を集めて、肥料の売買や金融サービス等の事業を行いました。約8カ月で政府が穀物を備蓄して価格を調整する「常平倉」に統合され廃止されました。しかし「商法会所」は、株式会社の概

念と近代金融の先駆けとして、日本の経済史に重要な役割を果たしました。まさに渋沢翁が欧州で見聞し、学んできた近代化の初手Ⅱ第1歩であったと言えるでしょう。

### 明治新政府の一員として 日本の近代化に貢献

明治新政府の一員となった渋沢翁は、「新貨条例」という新しい貨幣の制度づくりに関わりました。新政府は、江戸時代の身分制度を見直し、様々な産業に西欧からの新しい技術や機械を取り入れ、大規模な改革を展開したのです。明治政府がスタートした時点では、通貨は統一されておらずばらばらで、明治新政府の財政を監督する大蔵省において渋沢翁は、全国で統一の通貨を設定すべく「新貨条例」という新しい貨幣制度づくりに関わりました。紙幣の発行を行う大蔵省の機関「紙幣寮」（現在の国立印刷局）の初代トップである「紙幣頭」になり、日本初の近代的なお札である「明治通宝」の発行に関わったのです。

さらに大蔵省在籍中の1872（明治5）年には明治政府の一員として、伊藤博文らと共に日本初の官営模範器械製糸場である「官営富岡製糸場」（群

馬県富岡市）の設立に関わります。群馬県富岡市に建設された「官営富岡製糸場」は、殖産興業の象徴として高品質な生糸の生産と近代製糸技術の普及を目的に、当時最新鋭の西洋の技術が導入されました。世界文化遺産にも登録されている約100mの巨大な木骨煉瓦造りの建物（置繭所、繰糸所など）は、明治以降の日本の産業発展を牽引する象徴的な建造物というだけでなく、そこにおける最新鋭の技術導入、人材育成、産業振興という国家的なプロジェクトでもあったのです。その渋沢翁の手腕の基盤には、実家の稼業でもあった養蚕の技術があったのだと思います。

官職を辞した渋沢翁は、さらに米国のいわゆるナショナルバンク（国法銀行）制度を模範とした「国立銀行条例」の制定を推進します。この国立銀行というのには、法律に基づいて複数の民間銀行が「国立銀行券」と呼ばれる「不換紙幣」を発行できる制度であり、1872（明治5）年に条例が制定されると、翌1873（明治6）年には大蔵省の役人を辞して「第一国立銀行」を設立。その総監役となり、後に頭取となります。

新しい時代とともに新たに会社をつくるために必要な資金を貸し、ものづくりなどの産業をおこすこともできる仕組みを日本に取り入れるために第一国立銀行（現在のみずほ銀行）を設立したのです。そこから全国各地のさまざまな銀行の設立、さらに全国銀行協会や、東京商工会議所、東京証券取引所など、同じ業界同士が協力し、ともに発展を目指す団体の設立にも幅広く関わりました。

### 道徳経済合一説

#### 「日本資本主義の父」

渋沢翁は幼い頃から「論語」を学びました。「論語」とは孔子の教えを弟子たちがまとめたもので、人間が善く生きていく上での人間関係や自己修養の具体的な指針が示された古代中国の最も重要な儒家の文献です。

根底に「論語」の考え方があった渋沢翁は、常に私利私欲ではなく公益を追求する姿勢を貫き、財閥を作ったり、自分の名前をつけた会社を設立することに注力せず、企業に対して設立時のアドバイザーや出資、経営者に対する相談役を務めたりして、実際の経営は信頼できる人間に任せることが多かったといえます。同時代には、土佐藩の地

下浪人出身だった岩崎弥太郎の三菱財閥、富山藩の茶坊主出身だった安田善次郎の安田財閥など多くの財閥が生まれていますが、もし渋沢翁が財閥を作ろうとしたり、会社に自分の名前を付けようとしたら、あれほどまでに多くの企業に関わることはできなかったのではないのでしょうか。渋沢翁は、日本の近代化に向けて産業や公共事業を発展させて国を豊かにし、潤沢な経済を回しながら国を良くしていく、経済と道徳の両立を考えていたのだと思います。

とかく財閥が商社や銀行、鉱工業など、利益の追求に走る傾向が強い中、渋沢翁は公共性の高い社会事業を数多く立ち上げ、自ら会長となることが多かったと言います。金銭には換算できない大きな「徳」を求めたのです。

因みに、渋沢翁が起業に関わった企業は約500、教育・社会関連事業は約600を数えます。

良い意味で「欲が深かった」渋沢翁だからこそ、これだけの企業や社会事業に関わり、富だけでなく名誉を得たのだと思います。

次号では、渋沢翁の社会貢献に目を向けてみたいと思います。